

漱石『三四郎』心の乱暴な女

Junko Higasa 2017.2.17

美禰子は23歳である。経済・美貌・知性など恵まれた条件を持ちながら、何故その年まで結婚が決まらなかったのか。それは自由恋愛結婚を求めたからだろう。両親が亡くなっているので、兄が父権代理人となり、彼女の結婚相手を決めるとというのが、当時の通例である。しかしキリスト教徒として、文明の先端に行く美禰子は「イプセンの女」の如く「女性も人間である」という考えのもと、環境に恵まれた「人形」としての幸せよりも、人間としての人生を選びたかった。そこで美禰子は、自由恋愛結婚を求めて「心の乱暴(考え方の根本が乱暴)」な行動に出た。

「自分が結婚年齢のリミットに達する」ことを示唆する誕生会案内状を野々宮に出した頃、三四郎と出会い、二人へのアプローチが始まる。しかしどちらからも結婚の話は出ない。兄の結婚が決まれば、自分もどこかに嫁がなくてはならない。期限は迫る。そこで三四郎にお金を貸し、展覧会に誘ったが、全く気持ちが伝わらず空振り。ついに兄の結婚が決まって、兄の決めた相手と結婚せざるを得なくなった。

肖像画が『余り出来方が早いので御驚きなさりやしなくて』という言葉は「三四郎がはっきりしない間に見合い結婚が決まってしまったので、急いで描いてもらわなければならなくなった」ことを物語る。

肖像画は政略結婚で「人形」となる前に、人間として「恋愛」(迷子になった恋)が存在した証である。